

2009 年度

外交・安保サマーセミナー

活動報告書

日時：2009年9月25日(金)～27日(日)

場所：シースケープ伊豆高原（静岡県伊東市八幡野宇ニタ1131-62）

テーマ：「新しい国際秩序を模索する世界と日本」

参加者：講師 13 名、学生・社会人：31 名、事務局：5 名

■セミナーの目的

国際政治や外交・安全保障を真剣に学ぶ学生、国際ビジネスの最前線で活躍するビジネスマン、外交や安全保障の現場第一線で活躍した元外交官や自衛官、この分野の最新動向を研究する学者や研究者たちが、世代を超えて集い、世界と日本について真剣に議論を交わし、日本がどのような外交・安全保障政策をとるべきなのかを具体的に検討し、かつ志を同じくするものたちの横と縦の絆とネットワークを深めよう、というのがこのセミナー開催の目的である。

■報告概要

今回は講師、生徒合わせて 50 名近い参加者が集い、08 年をはるかに凌ぐ盛り上がりを見せるセミナーとなった。プログラムも分科会の数の増加だけでなく、ポリミリを前提としたチームごとの情報収集、戦略策定のグループワーキングの時間を設け、各自が目的意識を持って講師に質問をし、収集した情報をチームの他のメンバーに伝えて、グループ全体で議論を深めることができるように、プログラムにも工夫を加えた。講師の選定も、軍事に偏ることのないよう、研究者やジャーナリストを加え、多彩な顔ぶれとなり、セミナーの色をさらに多彩なものとした。

また海上自衛隊基地視察から始まり、2 日目の夜には写真家横田氏の米軍従軍報道ビデオの観賞を加えるなど、机上の空論にならないよう、現場の状況を理解し、より深い洞察力と現実感覚を持って外交戦略の策定に取り掛かれるよう、プログラムの組み立てにも工夫を加えた。

さらに産経新聞の記者を同行取材させることで、当セミナーの活動やその意義を広く一般に知らせる広報活動という側面も考慮してプログラムを実施した。

分科会に割り当てられる時間の配分や、全体会の内容やその構成など、まだまだ改善が必要な点も確認されたが、参加者からの反応はよく、全般的には充実した満足度の高いセミナーとなった。前回参加した中から 10 名以上のリピーターがきた点も、セミナーの充実度をはかるうえでの目安になったと考えられる。次年度は、学生から社会人になってからもリピーターとして参加してもらえよう、幅広い層や分野の参加者に満足してもらえるような会に、さらに充実度を高めていきたい。

■活動記録

9月25日(金)

●10:00～

横須賀海上自衛隊視察

今年のサマーセミナーは、元海将古澤忠彦氏のご支援を受けて、横須賀海上自衛隊の護衛艦視察で始められた。これから2日間、外交・安全保障を勉強するにあたって、現在の日本の防衛力の一端を、実際に護衛艦という我が国の保有する軍事力の一部を見ることで、より身近なものとして感じ、考えてほしいと思ったからである。

10時の集合時間にはほとんど遅刻者がいなかったが、移動時間等で予定より時間がかかってしまい、少し定刻より遅れての開始となった。その関係から、海上自衛隊部隊指揮官殿との懇談をまず行うこととなった。部隊指揮官殿は、海上自衛隊の歴史と現在の能力や任務について、基本的なお話を、自身の体験を交えながらわかりやすく解説して下さった。

学生からは中国や北朝鮮からの海の脅威や最近のソマリアでの海賊対策、それに海上自衛隊隊員の待遇やリクルートに至るまで、極めて専門的かつ広範囲な質問が積極的になされ、指揮官殿もサービス精神旺盛に丁寧な回答をしていた。

この後、3つのグループに分かれて艦艇を見学した。自衛隊側の準備は非常に組織化されており、きびきびと無駄のない動きで50名近いわれわれの集団を3つに分けて引率していただいた。学生たちの中には既に何度か護衛艦を視察したことのあるものもいたが、初めての参加者は特に興味深く艦艇での生活や兵器システムの説明に耳を傾けていた。

お昼は、日本海軍以来続く海上自衛隊の名物である「海軍カレー」をいただいた。学生は船員たちの食堂で、講師陣は別の部屋でそれぞれ海軍カレーをいただき、自衛官たちとの議論に花を咲かせた。

●13:30～

開会式 in バス

予定の時間をオーバーして海上自衛隊の視察を終え、急ぎ伊豆高原のシースケープに大型バスで向かうことになった。現地到着が大幅に遅れることが予想されたので、時間節約のため、バスの中で開会式を行うことになった。

吹浦理事長のご挨拶、菅原実行委員長からプログラムの説明があった後、一人一人が自己紹介を行った。まずは講師の先生方、そして参加者の生徒たちが、今回セミナーに参加した理由や現在の関心事などについて簡単に各自紹介をした。

続いて事務局の部谷より、最終日のロールプレイ・シミュレーション「ポリミリ」についての説明がなされた。初心者も多い中で「ポリミリ」を成功に導くため、この後も何度となく、その要領や意義について事務局や講師から説明することになる。

●16:00～

全体会

シースケープ到着後、すぐに大会議室に集合し、施設内での注意事項を、事務局の伊藤より説明。プログラムの確認と分科会の要領などを説明し、すぐに分科会に分かれた。

●1630～

◇分科会1－1「戦略の基礎を考える」講師：柿原国治

「国家戦略」とはそもそも何なのか？ 経済や安全保障政策と国家戦略との関係はどのようなものなのか。国家戦略を決める要素には何があるのか。国家の利益を守り、また促進するための総合戦略をどのように構築すべきなのか。今、日本に最も欠落している「国家戦略」を策定するために考慮すべき事項や、戦略を立てる手順について、米国防戦略大学で学んだ戦略のスペシャリストである講師が、歴史的な事例や、大国の戦略の比較研究などを通じて、わかりやすく解説した。

生徒たちにとっては、最終日のポリミリで、担当国の国益を踏まえて、その国益を追求する国家戦略を打ち立て、それに基づいて各事象に応じた外交・安全保障政策を策定して、その政策を実施するための外交交渉を展開することになる。そうした観点から、国益や国家戦略を立てるための基本要素やその手順について活発な議論がなされ、柿原講師からも具体的な事例を用いた丁寧な説明がなされた。

◇分科会1－2「インテリジェンスと情報操作」講師：菅原出

「インテリジェンス」とは、政策当局者の政策に役立つような目的のために、評価・分析された情報のことであり、スパイや秘密工作のことではない。政策立案、策定、決定の過程におけるインテリジェンスの役割やインテリジェンス機関の機能などについて、基本的な解説を行ったうえで、先のイラク戦争におけるインテリジェンスの役割や悪用の事例を使い、インテリジェンスが政策当局者の意向によって歪曲されたり、都合のよいインテリジェンスだけが使われるようなことが起こりえる、ということを議論した。

また広義のインテリジェンス活動の一環で、日々われわれが接するメディアの情報などが意図的に操作されている現状を、特にイラン核問題などを例にとって検討することで、情報操作の手口を学び、情報の受け手として「操作」されないようにするためには、どのようなことに注意すべきなのか、ということについても議論を深めた。

◇分科会1－3「外交とは何か？」講師：鈴木邦子

外交はそもそも何のために行うのか？ 外交を行うためのツールにはどんなものがあるのか？ 外交力を支えるツールにはどんなものがあるのか？ 政・官・民のそれぞれのエリアで活躍された経験のある鈴木講師が、外交の基本的な概念や目的、その現場での実情などについて、外務省時代の経験を踏まえて丁寧に解説した。外交力を構成する経済力、開発援助、技術協力や軍事安全保障など、日本が有するツールを確認し、それぞれのツールの使い方を検討することは、ポリミリで各国が戦略

を組み立てるうえでも不可欠の作業となる。この基礎の講義では、最終日のポリミリでの実用、という点を踏まえて、生徒たちに外交の基本をかみ砕いて解説するという形になった。

◇分科会1-4「日米安保と自衛隊 ―日本の防衛力―」講師：岡本智博

そもそも日米安全保障体制とはどのようなものなのか？日本の自衛隊とはそもそも軍隊として機能するのか？その実態は？元空将の岡本講師には、安全保障の基礎から、最先端の米軍のハイテク兵器の現状まで、幅広く「軍事」の基本を解説していただいた。万が一の有事の際に、自衛隊に何ができて何ができないのか。日本の安全保障を考える上で不可欠の自衛隊の現状と問題点について、他では決して聞くことのできない、実体験に基づく興味深いお話を賜り、参加学生たちからは大変好評であった。

●1830～

夕食

●1930～

◇全体会1-1「世界の潮流 日本の課題」講師：吉崎達彦

米国発の金融ショックと世界規模の不況。オバマ政権の誕生と関与政策を軸にした米国の新しい強調外交。いったい世界はどこに向かって進んでいるのか。経済と安全保障を複眼的に語れる数少ないエコノミストである吉崎講師は、当面の日本政府の政治経済の課題やオバマ政権の外交政策を概観し、新しい世界秩序の中で、日本がどのような道を歩むべきかについて、興味深い提言を投げかけた。

日本の国家としての選択肢として以下のA案とB案のどちらで行くべきかを問うたのである。

従来の議論：「A案」(Ambitious Japan)←小泉政権・自民党？

「日本は超大国のはしくれ。国際的な責務を果たすべし」

現状認識 日本は世界第2位の経済大国。リーダーとしての役割あり

方向性 「普通の国」を目指す。まず集団的自衛権の解釈変更を。

対米関係 日米関係が外交の基軸。日米安保条約は国際公共財。

対アジア関係 「アジアの盟主」の座は中国には譲れない。

対国連 当然、常任理事国の地位を目指す。

イラク・アフガン 中東の安定は日本の国益。応分の負担を行う。

北朝鮮問題 「対話と圧力」では「圧力」に力点。

経済外交 ドーハラウンド、FTA交渉を通じて貿易自由化に貢献。

新しい方針:「B案」(B=Blue Japan)←鳩山政権・民主党?

「日本は衰退過程にあることを自覚し、抑制的な外交を展開すべし」

現状認識	経済より安全保障優先の世界では日本はミドルパワー。
方向性	国際貢献は非軍事に限定。なるべく憲法の範囲内で。
対米関係	安保体制は堅持するも、従来通り「Reluctant な同盟国」で。
対アジア関係	地域覇権国になる中国をなるべく刺激しない。(例:靖国神社)
対国連	真面目な一加盟国として汗を流す。環境問題で貢献。
イラク・アフガン	無駄な努力にはなるべく手を貸さない。民間の支援を中心に。
北朝鮮問題	「対話と圧力」では「対話」に力点。
経済外交	農産物の自給率向上。戦略物資の確保に努める。

◇全体会1-2「米国覇権の現状と展望 —英米覇権交代の経験から—」

講師:坂本正弘

21世紀の初頭、世界経済の激動は、米国の覇権の秩序にどのようなインパクトを与えるのか。米中のG2時代もささやかれているが、米国の覇権の後退とともに、中国が世界の覇権国として浮上する可能性はあるのか。世界システムの研究者である坂本講師は、このような大きなパースペクティブから、今後の世界の構造を考える上で、覇権が英国から米国に移行していった歴史的な過程を再検討し、それと現在の状況を比較することで、米国から中国への覇権の移行の可能性について論じた。

学生たちにとっては、普段考えることのない、世界の構造分析について、極めて刺激的でグローバルかつ歴史的な深みのある講義を聴く貴重な機会となった。

9月26日(土)

●0730~

朝食

●0900~

特別全体会「軍事革命(RMA)とは何か?」講師:岡本智博

当初予定にはなかったものの、前日の覇権の議論のフォローアップとして、覇権の条件としての軍事力、とりわけ現在の覇権国米国の軍事力の現状を理解する上で、軍事革命の理解は不可欠、との問題意識から、岡本講師からの申し出を受けて急きよ行ったショート講義。普段、軍事とは遠い学生たちにとっては、少し専門的ではあったものの、軍事の最先端がどこまで進んでいるのかについての貴重な講義となり、米国に対する理解がより深まったようであった。

●1000～

◇分科会2-1「日本の領域警備」講師：古澤忠彦

日本の防衛は「領域防衛」の概念から捉えなおす必要がある。これまでの「海から守られた」我が国の安全保障から、「海を守ることによって我が国の領土と領海の安全を維持する」という発想の転換が必要である。特に隣国の北朝鮮からの不審船、工作船の脅威や、中国の軍備増強とそれに伴う海洋進出、海洋権益の拡大といった動きは、現実の日本の脅威となっている。海洋権益をめぐる日中間の紛争が発生した場合、日米安保条約の範囲外であることから、米国による支援が期待できない点など、海洋安全保障から見た日米同盟の限界や役割などについても、具体的な解説とその対応策が活発に議論された。

◇分科会2-2「北朝鮮の経済貿易動向」講師：保井俊之

国家安全保障戦略を立てる際、プロファイリング、ファクトファインディング、数値分析やシナリオ分析といったインテリジェンスの手法を使い、正確に状況を把握することが、その出発点となる。その実例として、このところ累次の経済制裁が国連安全保障理事会により実施されている北朝鮮の貿易動向の変化を実際に俯瞰し、制裁の効果についてご説明をいただいた。

普段知ることのできない北朝鮮の経済状況を、客観的な貿易動向のデータを詳細に分析することで知り、経済制裁の発動のタイミングなどと合わせて分析することで、その効果まで分析が可能だということを、この講義を通じて実証的に知ることができ、学生たちは驚きと共に、大きな刺激を受けて議論を沸かせていた。

◇分科会2-3「日米中 三国外交の舞台裏」講師：秋田浩之

米国と中国という二つの大きな山に挟まれた日本。日米中の三国は、経済政策、外交、安全保障政策をめぐる、日々激しい外交戦を展開している。この三国はそもそも、どのような利益を共有し、どのように利益が対立し、それぞれ国内にどのような勢力や利益団体がひしめき合っており、それぞれの外交政策に影響を与えているのか。そのインターアクションが、三国の外交関係にどのようなインパクトを与え、これまでの東アジアの秩序を形成してきたのか。それが今後どのような方向に進む可能性が高いのか？

ジャーナリストとして、三国の外交当局者に対する取材経験の豊富な秋田講師が、実体験を通じて、三国外交の舞台裏の生々しい攻防について具体的に解説した。アカデミックな議論から、実際の現場レベルの認識や政策当局者の感情など、生の取材でしか知りえないような話が盛りだくさんで、学生だけでなく、オブザーバーとして参加した講師も白熱した議論に参加していた。秋田講師は、当日の朝に伊豆高原に到着し、この講義を終えたのちに、東京にとんぼがえりするという激務の中、わざわざ時間をつくって駆けつけてくださった。そのご好意と熱意が、学生たちに伝わり、熱気あふれる講義となった。

●1200～

昼食

●1330～

◇分科会3-1「金融インテリジェンスの誕生と発展」講師：保井俊之

現代の国家安全保障は、国際金融や通貨システムの理解なしには語るができない。90年代以降、次々に世界を揺るがした三つの大事件—金融市場の進化とグローバル化の進展、911テロの発生、2007年からのグローバルな金融危機—は、いずれも、世界各国の安全保障政策の大きな転換点となったばかりでなく、インテリジェンスの新たな形態である「金融インテリジェンス」を誕生させ、発展させる契機ともなった。

ではそうして誕生した「金融インテリジェンス」とは何なのか？この分野の数少ない専門家の一人である保井講師が、いまだに学術的にも解説のされていないこの分野の現状を、理論的かつ実証主義的に解明し、かみ砕いて解説した。北朝鮮に対する金融制裁の意味や効果、イラン核問題に対する対応としての経済制裁の意味なども、より深く理解をすることができ、学生たちからは「目からうろこが落ちるような話だった」と大好評であった。

◇分科会3-2「オバマ政権の核戦略」講師：神保謙

「核なき世界」という大きなヴィジョンを打ち出したオバマ大統領。アメリカの核戦略はこの大統領の出現と、「核なき世界」の創出という理念の下、どのように変化し、何が起きようとしているのか。アメリカにとって、核兵器とはそもそもどのような意味を持ち、その軍事戦略の中での位置づけは、911から今日にかけてどのように変化してきているのか。

核戦略の専門家である神保講師が、このディープなテーマを真正面から議論し、この問題から派生する様々な議論を俯瞰し、そのトレンドや課題について分かりやすく解説した。学生からの質問やディスカッションの時間では、日本にとっての核武装のオプションなどについて賛否両論が出て白熱した議論になるなど、時間をオーバーするほどの盛り上がりを見せた。

◇分科会3-3「朝鮮半島をめぐる戦略地政学」講師：柿原国治

北朝鮮の核問題で不安定化する朝鮮半島。この問題の根深い背景を知るには、金王朝の特殊な体制に関するミクロな政治分析だけでなく、この半島が海洋国家勢力（シーパワー）と大陸国家勢力（ランドパワー）の力の緩衝地帯に位置するという戦略地政学的な視点が不可欠である。中国が北朝鮮をどんなことがあってもかばい続ける理由とは何なのか。韓国やロシアが北朝鮮の崩壊を望まないのはなぜなのか。アメリカが北朝鮮問題で中国に頼らざるを得ないのはなぜなのか。

現在の朝鮮半島の現状維持状態を招いているこうした関係各国の態度＝政策は、歴史的、地政学的、そして文明的視点、すなわち関係国間の歴史的相互作用の分析を通じて、より明確に理解することが可能だ。戦略地政学の専門家でもある柿原講師は、こうした分析を通じて、朝鮮半島の主要関係国間の相互不信が、結果的に現状維持＝地域安定へ作用する「安定のパラドックス」を生

み出している、という驚きの現実を解説した。学生たちは、翌日に行われたポリミリで、自らこの「安定のパラドックス」を体験することにより、二重に柿原分析の洞察力の深さに驚きを深めて、国際政治の面白さに気付いた様子だった。

●1530～

休憩

●1630～

個別相談会「プレ・ポリミリ」情報収集・戦略策定チームワーキング

この時間は、翌日の「ポリミリ」に向けて、各チームが自国の国益や外交ツール、そして各国との関係を整理して「戦略」を策定すべく、講師に対して質問をして情報を収集する作業を行った。基本的なポリミリの目的と各チームの手順は以下の通りである。

◇ポリミリの目的

「ポリミリ」の究極的な目的は、特定の国家の外交政策決定者を演じることで、限られた時間内に、限られた情報しかないという制約の中で情勢を分析し、その状況が自国の国益に与える影響を評価する過程を勉強することである。また、与えられた状況下で、自国の国益を守り、促進するために最適な外交・安全保障政策を決定し、実際に他国との交渉を行うという一連のプロセスを経験することによって、複雑な各国の利害が絡み合う国際関係に対する理解を深め、自国に有利な国際環境をつくるために、どの外交カードをどのように使うべきかという戦略策定のプロセスを体験的に学習することである。

さらに国家の危機的な状況の中で、その危機を回避、もしくはその危機に対処するための最適な方策を、時間的余裕のない中で下すというプロセスを疑似体験することにより、大変なプレッシャーの中で決断を下すことの難しさを体験的に学習することである。

◇作業の手順

STEP 1: 情勢分析

- 事件に関する情報を収集・分析し、「何が起きているのか」「自国に対するインパクトはなにか」を評価する。
- 他国がこの問題にどう対応するかを分析する。

STEP 2: 政策決定

- この事件、問題に対して、達成すべき目標を設定する。
 - 自国が持っている外交カードを検討する。
- 各国の利害関係を考慮して、どの外交カードをどのように使うかを決定する。

STEP:3 外交交渉

- 交渉する相手国が、何を目的に、どのような外交カードを用いて、どのような要求をしてくるかを検討する。
- 相手のカードと自国の持つカードを比較・検討し、交渉戦略を決め、それに従って交渉を行う。

◇各チームの作業

分科会や個別相談会やその他の機会に、自分が担当することになった国の外交戦略や対外関係だけでなく、6カ国すべてに関してなるべく多くの講師からできる限り多くの情報を集めておくことが重要。「国家Aは国家Bから何をしようとしているのか」、「国家Cの国家Dに対する強みや弱みは何か」というように国家間の利害関係を整理することで、各国が持つ外交カードを検討する。そして自国の外交カードを整理して、自国の外交上の優先順位を考慮した上で、どのカードをどのように使うかを決めていく。

具体的には以下のような質問と回答が、各グループと講師の間でなされ、各チームはポリミリを戦う上での基礎知識を学んだ。

1. 日本

日米同盟のほころびが具体的にどのような形で生じているか？

対応：民主党政権は、基本的に準軍隊にも及ばない自衛隊を国際貢献のために派遣することは許容できないという見解を取っている。したがって、代替案として NPO レベルの農業支援、教育支援、警察機能強化支援、これらに伴う施設建設等の支援を実施する用意がある。これに対して米国は、かつて自民党が踏み込んだ国際貢献を放棄することは国際公約を破ることであり、米日関係にも悪影響をもたらすと談話を発表。

2. ロシア

中国と北朝鮮を分断するため、ロシアが中国に対して切ることができるカードのなかで、中国が嫌がるものは？

対応：中国と北朝鮮は、朝鮮戦争をともに戦った「血盟関係」にあり、これまでの中国側の北朝鮮投資の実もあり、簡単には分断を図ることはできないであろう。しかし、ロシアが中国および北朝鮮に対して取ることが可能な外交政策は、やはり武器支援であろう。北朝鮮に対しては、ロシア・北朝鮮友好協力条約の復活とともに、ロシアが示す「主権民主主義」の理念に依拠した外交政策を理解し、北朝鮮の核兵器開発は容認しない、原子炉施設と核燃料処理の提供を行い、という基本路線を示すであろう。そして中国に対しては、これまで中止していた武器輸出を再開することによって、懐柔を図るであろう。

3. 米国

北朝鮮に対するアメリカの外交的選択はいかなるものか？

対応：CVID は基本外交路線として、絶対に変更しない。CVID が完全不可逆的に達成されたと5カ国が認識した段階で、米国は他の4カ国とともに北朝鮮支援を実施する。米国は単独で北朝鮮支援を実施することはない。

米国が日本に対し核物質の拡散阻止を目的とする PSI への参加要請を求めてきたが、日本政府の対応はどのようになるのか？

対応：日本政府は、自衛隊は準軍隊にも至らない領域防衛のみに携わる防衛力であると規定している。したがって、海上保安庁も海上自衛隊も同列の領域防衛力であるとの認識の上、領域内における PSI には海上自衛隊および海上保安庁の両組織で応ずる用意がある。

4. 北朝鮮

ロシアが北朝鮮に軍事介入する可能性は？ するとしたらその規模および形態は？

対応：ロシアは、北朝鮮との相互防衛条約の復活を考慮していない。あくまでも友好協力条約の復活であり、北朝鮮が核兵器開発を行わないとの誓約の下での、武器支援を再開するとの路線である。

●1800～

夕食

●2000～

◇全体会2-1「パネルディスカッション」現在の日本の課題

この全体会では、民主党政権の誕生という新しい政治状況を受けて、今後日本がどのような方向に進む可能性があるのか、またどのようにすべきなのか、について松井講師のキック・オフ・ブリーフィングを受けて、坂本、吹浦、古澤、岡本の4氏にパネルディスカッション形式で議論していただいた。

◇全体会2-2

「オバマの戦争 第二次アフガン戦争の行方」講師：菅原出

「アフガン戦争最前線 従軍記者が見た米軍とタリバン」映像・解説：横田徹

この全体会の後半は、写真家横田氏が8月にアフガニスタンで従軍取材をした際に撮った貴重な映像を、横田氏と対テロ作戦に詳しい元海上保安官の坂本新一氏の二人で解説付きで観賞するという時間にした。それに先立ち、現在のアフガニスタンの状況を、オバマ政権の対アフガン政策を概観することで理解を深めるべく、15分程度、菅原講師からのブリーフィングがあった。

それに引き続いて、約1時間、淡々としたしゃべりの横田氏と、きりっと引き締まる短い坂本氏のコメント付きで、衝撃的ともいえるアフガン米軍の最前線の映像が上映された。生の戦争の現場映像に、学生や講師を含め、一同「言葉も出ない」状況になり、対テロ戦争の実態をまざまざと見せつけられた衝撃に打ちのめされるような思いに浸った。

●2230～

懇親会

9月27日(日)

●0700

朝食

●0800

ポリミリ・スタート

1. 状況:北朝鮮による核拡散

- ・ パキスタン麻薬・武器商人を經由してアルカイダに「セシウム137」を売却か？
- ・ ミャンマーに対する「未加工プルトニウム」輸送の疑い

(1)声明(各国の行動)

日本:明確な国連決議違反、ピョンヤン宣言に違反。国連常任理事開会再要求。米中に対し個別対話。

米国:北朝鮮の疑惑に対し中国と事実関係確認のための交渉申し込み。査察強化態勢。

露国:核物質の拡散反対。あらゆる手段をとる容易。国際社会は北朝鮮国内混乱に対し支援をすべき。国内の警戒体制強化。米中に対し外相会談提案。

中国:地域的協力提案。朝鮮半島の非核化推進。5カ国に対し特使派遣の用意。

韓国:拡散阻止行動。事実確認のために米・北朝鮮に対し特使。9月中旬に6者協議開催を提案するための交渉申し込み。

北朝鮮:テロ組織への核物質売却という北朝鮮に対する疑いは国際帝国主義の陰謀。ミャンマーへのプルトニウム輸送は、平和利用の範囲。国内パンデミック蔓延への対応で諸外国からの援助が得られない以上、貿易利益で対処措置を考慮せざるを得ない。

(2)交渉

日本:6者協議開催中国・韓国と合意、開催場所には言及せず。安保理開催合意。

米国:北朝鮮に対するパンデミック支援は実施。しかし核物質拡散問題とは切り離す。韓国とはPSI協力・強化、韓国で開催の6者協議参加合意。

露国:6者協議開催合意。場所は保留。人道支援の容易。国境警備実施。タミフル増産。日本からの安保理開催には合意していない。

中国:6者協議開催合意を取りまとめ。パンデミック支援合意、6者協議で取り扱い提案。開催場所は北京を主張。中朝国境封鎖。人道支援実施。

韓国:6者協議の持ち回り協議に米国と合意。人道支援へ積極的に実施。開催場所はソウルで！！

北朝鮮:安保理開催反対。人道援助感謝。6者協議への参加条件として人道支援を実施せよ。セシウム輸出調査。中朝国境封鎖に対してはワクチン到着を待って中朝国境開放合意。日本の拉致問題

状況第1に対する岡本・古沢審査官所見

- ・ 北朝鮮による核物質拡散疑惑に対し、事実関係の確認手続きをとらなかった日本、ロシア、中国。その意図はどこにあったのか？情報は決してひとつのソースからの情報を信じてはならない。関連情報を入手する努力が不可欠。ロシア情報機関(KGB)のこれに関する情報は？
- ・ もしこのような確認を行わなかったら、イラク戦争開始前のパウエル国務長官の誤りを繰り返すことになるが・・・
- ・ 自国の国益は何か？その達成手段はいかなるものか。これらについて、まず確認しておく必要がある。漫然と対応すると、後で足をすくわれる結果となる。
- ・ 洋上における立ち入り検査。6カ国以外への調査依頼。交渉を通じて関連交渉事項への取り組みトライ。

2. 状況：北朝鮮船籍の貨物船が、一週間後、ドバイ当局に差し押さえられた。積荷はミャンマー向け「プルトニウム」とまったく同じ「プルトニウム」。行き先はシリア。この事実に対する対応

(1) 声明

日本：パキスタン・ドバイの2事案発生を懸念。安保理開催要求。韓国との連携調整。日米韓競技を画策。パンデミックについては人道支援・タミフル100万本、食料50万トンを考慮。

米国：大問題発生。ドバイとシリアに事実関係調査依頼。2+2開催要請。パンデミック支援は切り離してWHOの活動要請。

露国：タミフル配布国境中心に実施。ドバイ・シリアへの事実確認。海洋検査行動開始。安保理開催慎重。

中国：パンデミック拡大阻止対策強化。6者協議の日時、場所、議題に関して交渉。中朝国境封鎖強化。

韓国：事実確認調査。国際協力としての臨検参加の用意。人道支援強化。米中露への特使派遣。

北朝鮮：10万人規模の死者発生。6者協議の一刻も早い開催要請。2000万本のタミフル要望。プルトニウムの増産は継続。イランの核開発支援発表。米国への特使派遣用意。

(2) 交渉

日本：米韓との交渉・事務レベル協議提案。米からの4者密室協議提議に疑問。

米国：米日韓2+2会議開催。WHOを通じた支援を主張。核拡散は容認せず。シリア向けの核物質についてロシアの黒海艦隊派遣の容易に了承。

露国：250万人分タミフル準備。北京6カ国協議開催了承。シリアに対する臨検準備。

中国：250万人分タミフル準備。北京6者協議開催了承。開催時期10月4日。議長は中国。議題は事実関係確認。6者協議の是非。核廃棄協議。

韓国：緊急人道支援の実施。米国からWHO・日本からも支援調整。韓・米・日会議開催要請。

北朝鮮：人道支援感謝。6者協議には人道支援後の参加堅持。

(3) 6者協議における各国の主張(外務大臣級)

日本：北朝鮮の非核化は不成功。米国の安保理におけるリーダーシップを期待。パンデミック支援は実施の容易。拉致問題も忘れぬよう。

米国：核不拡散の世界を追求。北は IAEA の受け入れ。各国は PSI の協力を。WHO を通じた支援。

露国：人道支援は WHO 優先。ロシア主導の医療監視団を派遣。燃料供給全面協力。パイプライン技術の提供を。核の平和利用賛成・核拡散反対。米口核削減。ロシアは北朝鮮の核物質買取り用意。原子炉開発の支援の容易。

中国：議長国。不拡散の枠組みについて。追加援助に関して。核の平和利用容認、しかし不拡散査察体制の確立のため AAEA 設立提案。人道支援に関し WHO に丸投げの米国に不満、AHO 構想を北京に設置を提案。

韓国：核拡散は容認できない。人道支援・経済支援を推進。AHO 反対 WHO 堅持。同胞支援としての経済援助。

北朝鮮：ロシア・中国からの人道支援感謝。イラン・シリアへの核支援は経済制裁を乗り越えるための手段。中朝国境開放。南北開放。ロシアの援助期待。AHO 構想に好意的。

状況第 2 に対する岡本・古沢審査官所見

- ・ 新たな北朝鮮による核物質拡散事実に対する各国の対応については、明確な複数の情報源による情報と確認したうは、直ちに行動を取ることが国際常識である。漫然と確認行為をとることはない。情報は、二つ以上の事実が合致したときは正確な情報と判断。“迅速な対応を優先するのか”と“情報確認のための余裕を容認してでも情報の正確性を確認するのか”この状況ではどちらが妥当であるかを考えることが必要。
- ・ パンデミック蔓延事象への人道支援と核物質拡散事実への対応は、まったく切り離して対応するのが正解であろう。これまでも北朝鮮を除く 5 カ国は支援と核拡散防止をリンクして対応し、完全な失敗を重ねてきた。それにもかかわらず、いまだに北朝鮮の“リンク作戦”に対応するのは、残念であるし、不思議である。今般も見事に北朝鮮の戦略に残りの 5 カ国は踊らされた。
- ・ 6 者協議という枠組みに対する疑問。協議対象の北朝鮮を入れた会議は妥当であったのか。北朝鮮を除く 5 者協議が妥当ではなかったのか。6 者協議であったため、北朝鮮の米朝協議戦略が成功したのではないか。オバマ政権はカーター、クリントン、ブッシュ政権の反省を踏まえて、5 者協議の方向性を探ることにしたのではなからうか。
- ・ 緊急人道支援のための 5 者協議の開催を考慮すべきであった。
- ・ 国連安保理開催の是非。6 カ国協議開催の是非。と人道支援継続の是非の区分。
- ・ 国益をどのように捕らえるか。中朝兄弟「血盟関係」の絆。ロシア中間自国利益優先。米(核開発阻止)・日(核開発阻止、拉致問題解決、日朝友好条約締結と国交回復)・韓連携(核開発阻止、同胞支援、朝鮮戦争停戦関係の終了)。
- ・ 中国主導の国際社会の建設という国益に立脚したリーダーシップを発揮したので 100 点満点だった(保井先生)。

- ・ 日本は適切な提案を実施した(坂本先生)。
- ・ 人道支援に議論が集中して核不拡散の問題については弱くなった。軍事的な圧力をかける以降も会った。日本に対しては、心配(鈴木先生)。
- ・ 北朝鮮と一番パイプがあるのにそれができない韓国のジレンマ。ワクチン提供の国際世論をリード(松井先生)。

10月4日6者協議の開催。自国の立場主張。核問題および追加的な人道支援を議題とする。

3. 状況:最悪なシナリオの展開

(1)各国対応

日本:弾道ミサイル破壊措置。情報収集強化。中国へ特使派遣。

中国:非難声明。国境封鎖。国内治安強化。韓国に特使派遣。パイプライン閉鎖。

米国:グアムから B-2 。潜水艦を日本海に展開。在韓米軍と緊密に連携。38 度線及び中朝国境への部隊派遣の用意あり。

韓国:在韓米軍との連携強化。国境沖の警備強化。東海沖に艦艇派遣。

露国:北朝鮮と日本に対し冷静対応を要請。S-400 展開。

北朝鮮:領海内にコンテナ船を展開。

(2)交渉の結果と今後の行動

日本:日米共同声明—北朝鮮の武力行動を非難。あらゆる事態への対応の用意。武力攻撃事態認定発令。米国との緊密な連携体制の堅持

米国:米韓日の緊密な情報交換。ロシアから北朝鮮に兵隊派遣のうわさあり。

露国:軍事顧問をピョンヤンに派遣。北朝鮮支援を表明。

中国:北朝鮮は「血の同盟」の兄弟であるが、今般の軍事行動は容認できず、日本海、黄海に艦艇展開。金正男を中心とした亡命政権を支援。

韓国:情報交換強化。大統領がピョンヤン訪問。

北朝鮮:米日の声明を事実上の宣戦布告と判断。テポドンの発射を準備。日本への攻撃準備完了。中国への核攻撃も辞さず。

状況第3に対する岡本・古沢審査官所見

- ・ 貧者のゲーム無理論にまたまた翻弄された。人道支援は緊急を要する課題。北朝鮮の核拡散行動への制裁は長期的対応の必要性。オバマ政権は「貧者のゲーム理論」を克服するため 5 者協議提案。CVID 完全実施後の人道支援を考慮。
- ・ 平時から有事への切り替えで日本は、直ちに武力事態を認定したが、その間に周辺事態の認定を必ず考慮すべきである。周辺事態の概念が未だに整理されていない。防衛白書を読んで欲しい。

4. 状況：イスラエルがイランのナタンツ核施設を攻撃破壊。米国で日本支援かイスラエル支援かに 乱れ。

(1)交渉と結果

日本：5 カ国に特使派遣。岡田首相「人間の鎖」を解け。「義を見てせざるは勇なきなり」国家防衛に専念。

米国：韓国・ロシアと会談申し入れ。米ロ共同声明：米露ともに行動。戦略パートナーとして認知。

露国：中国プーチン訪問。露米共同宣言。中国との金正雲政権を承認。正男はピョンヤンに連れ戻し、傀儡政権を許さない。

中国：北朝鮮の暴走に対し日本との軍事的連携を要請。国境封鎖。難民受け入れ。金正男政権を放棄。4兆円の経済援助。

韓国：米、露、日、に特使派遣。南北首脳会談。決裂。世界各国と共同歩調をとる。日本からの要請に応じて航空自衛隊機の飛来を容認。

北朝鮮：日本の挑発。金正男政権容認せず。中国内での難民暴動を画策。中国国内に核物質(IND)を所持したゲリラ潜伏・侵入させた。

状況：イランがホルムズ海峡封鎖。米国は日本よりもイスラエルを助けよの声。終了。

●1300

デブリーフィング

まとめ(岡本)

- ・ 参加者が最終的にはそれぞれの立場をよく理解しなりました。状況の人間になっていた。ポリ・ミリは成功した。
- ・ 想定外・想定外の連続で、現役時代に実施した指揮所演習の結果とまったく違う方向を見ることができた。各国の意思が思わぬ方向に持っていられる恐れをみた。
- ・ 周辺事態の認識が見えなかった。
- ・ 菅原さんこそご苦勞様でした！！小生も確かに疲れましたが、久しぶりの集団作業にテンションがあがりました。また、私が担当した部分でも、目からうろこという反応があり、やってみてよかったと思っています。それにポリミリは、よく検討が加えられていて、防衛省で実施したような大仰なシステムを使用しなくても、いろいろ考える材料が出るので、このようなやり方も貴重であると考えました。要は、知的水準の高い素人が集団で判断を加えると、防衛省でやったような、すなわち、同じ発想をするように訓練された自衛官だけでやるような場合と大いに違って、また違った結論や流れが出てくるということを認識し、少しの驚きと多くの感銘を受けました。来年も出来たらいいですね～ ご苦勞様でした。伊藤君、部谷君にもお伝えください。(岡本)
- ・ 古沢さん所見：疲れしました。しかし充実感あふれる爽快な心地よい疲れです。皆様、御苦勞さまでした。皆様のバイタリティーに脱帽です。本日、吹浦理事長から預かった伊豆のお菓子を持って、海上自衛隊横須賀基地にお礼の挨拶兼ねて雑談してきました。河野司令

官はこの秋の演習準備の作戦会議の合間に時間を取ってくれましたが、今回のポリミリゲームの成果を話したら、司令官自身が参加しなかったと冗談を言って居りました。彼自身は口硬く喋りませんでしたが、今年の演習シナリオが……のようです。(……は自己責任で言葉を入れてください)今回参加の学生は、いつでも艦隊参謀で使えと、大見えを切っておきましたが、ちょっと出すぎたことを言ったようですね。司令官は、講演時の若い学生の質問の質の高さに驚いていたようです。同時に、「最新鋭艦が不在で申し訳なかった。」と恐縮しておりました。今回のセミナーの統裁部の菅原さん他の皆さん、ありがとうございました。緻密で効果的な企画と運営でした。厳格な時間管理とマネージメントできわめてスマートなセミナー環境でした。講師の皆さんの内容の濃い講義には、大いに啓発されました。夕食時の団欒や質疑応答も貴重な時間でした。真面目な話も酒の肴になりますね。大学時代に返った気持でしたが、居眠りもせずに授業を受けたのは講師の皆さんの卓越した内容によるものでしょう。学生諸君の真摯で熱心な意欲には、ただ敬服するばかりです。50年前の私がこのように真剣で熱意があったかと反省しきりです。将来を託すに相応しい「若き獅子たち」です。夜中に寝首を搔きにきて質問を浴びせた学生には参りました。「軍人」として奇襲攻撃に備えていなかったわが身の油断を恥じています。運悪く彼らと入浴が一緒になり、胴長短足と出腹が一層目立ったのも閉口しました。次回からは、吹浦、岡本、松井氏等と共に別風呂にしてもらいたいものです。帰宅して3日間も会わないと、家内が「慈母観音」のように見えたのは私だけでしょうか？「セミナーが終わって多弁になった」とノタマワレました。未だ我が体内には余韻が残っているようです。皆さんとの再会を楽しみにしています。ありがとうございました。(古沢)

●1330

昼食

●1500

現地にて解散